

# 小田原史談

第63号

発行所 小田原史談会  
小田原市南町

## 原始・古代の小田原 (上)

杉山 博久

〔旧石器文化時代〕 昭和二四年、群馬県の岩宿遺跡において、洪積世の堆積土層とされている関東ローム層の中から、正しく発掘調査によって石器が採集されて以来、各地で同種の遺跡の発見が続き、この時代の研究はめざましい発展を

今となつてはその出土地を知る事の出来ないのが残念である。

〔縄文文化時代〕 縄文文化の起源については、現在多少の論議もあるが、一般には14Cによる年代測定の結果が承認されており、紀元前約一万年ごろと推定されている。そしてその終末は、西日本と東日本と若干のずれがあるが、西日本で紀元前三二〇〇

中期になると、これまでに発見された遺跡の数も多く、小田原市早川の神明山南町の天神山、久野の一本松、千代台地、国府津山遺跡などの諸遺跡、南足柄市沼田の西念寺裏の丘陵上、同塚原の玉峰、同狩野の久保、同弘西寺の弘西寺遺跡大井町の金子台遺跡も存在

する、これらの諸遺跡のうち、二、三の遺跡については調査も行なわれ堅穴式住居址なども確認されているが、表面採集された資料も多く、なかには完形土器なども採集されている。

勝坂式土器は、豪華な裝飾と雄大な把手をもち、大型の土器であることよって知られているが、器面の文様には蛇や亀などの爬虫類が描かれたりする例も多く、弘西寺や天神山遺跡出土の資料のなかに蛇身土器の破片を見ることができ

る。

後期の遺跡は天神山・久野星山・金子台・久所の北畑の原・下曽我の城前寺附近・南足柄市の狩野・雨坪・西念寺裏などに存在する金子台と狩野では学術的発掘調査が行なわれたが、堅穴住居址などのほかに、配石遺構が発見されている。

配石遺構の性格については諸説があるが、金子台や狩野の場合は、墳墓であると考えられている。時期は加曾利BⅠ式期である。

ところで当地方の縄文文化時代の遺跡は、この加曾利BⅠ式期以降急激に減少して発見されなくなるのであ

る。学問的にみて、きわめて貴重な資料であるが、

〔Daе Historie Japan〕 の中で報告している。

しかし、このマンロー採集の資料は、その後のわが国の学界では、正しい研究の対象とはならず長い間放置されて、その行方も詳ら

たのであるが、去る(昭和四三年)になって、同志社大学考古学研究室に所蔵されている資料の中から、前記の踏査の際の採集品中の一点と推定される資料が再発見され「赤味を帯びた褐色の石英の削片を素材とした尖頭器で」「錯向剝離の技術や、出羽洞穴下層の資料などと対比して、下部

資料などとの対比して、下部旧石器の可能性を強くする」とその詳細が報告されて

出たもので、洪積世文化終

末期の岩宿Ⅰ石器文化(一三、一三〇年前)と同じころのものとされている。

この旧石器文化の時代は地質学的には洪積世といわれ、その時代は氷期と間氷期のくりかえしで、間氷期

でも、気温は現在よりも平均して七、八度も低く、ナウマン象やオオツノジカなどの絶滅してしまった動物

が棲息し、富士山や箱根山の火山活動も活発で、さかんに火山灰を降らしていたと考えられている。

前期では水之尾や諏訪の原、それに猿山に断片的な遺物が出土しているし、足柄上郡大井町の下山田には相当規模の大きい諸磯B式期の遺跡の存在が知られている。その下山田では、昭和四〇年に発掘調査が行なわれ、多量の土器片のほか

に、磨製石斧、石匙、石皿、磨石、石鏃、石錘などが採集されている。

中期になると、これまでに発見された遺跡の数も多く、小田原市早川の神明山南町の天神山、久野の一本松、千代台地、国府津山遺跡などの諸遺跡、南足柄市沼田の西念寺裏の丘陵上、同塚原の玉峰、同狩野の久保、同弘西寺の弘西寺遺跡大井町の金子台遺跡も存在

する、これらの諸遺跡のうち、二、三の遺跡については調査も行なわれ堅穴式住居址なども確認されているが、表面採集された資料も多く、なかには完形土器なども採集されている。

勝坂式土器は、豪華な裝飾と雄大な把手をもち、大型の土器であることよって知られているが、器面の文様には蛇や亀などの爬虫類が描かれたりする例も多く、弘西寺や天神山遺跡出土の資料のなかに蛇身土器の破片を見ることができ

る。

後期の遺跡は天神山・久野星山・金子台・久所の北畑の原・下曽我の城前寺附近・南足柄市の狩野・雨坪・西念寺裏などに存在する金子台と狩野では学術的発掘調査が行なわれたが、堅穴住居址などのほかに、配石遺構が発見されている。

配石遺構の性格については諸説があるが、金子台や狩野の場合は、墳墓であると考えられている。時期は加曾利BⅠ式期である。

ところで当地方の縄文文化時代の遺跡は、この加曾利BⅠ式期以降急激に減少して発見されなくなるのであ

る。学問的にみて、きわめて貴重な資料であるが、

〔Daе Historie Japan〕 の中で報告している。

しかし、このマンロー採集の資料は、その後のわが国の学界では、正しい研究の対象とはならず長い間放置されて、その行方も詳ら

たのであるが、去る(昭和四三年)になって、同志社大学考古学研究室に所蔵されている資料の中から、前記の踏査の際の採集品中の一点と推定される資料が再発見され「赤味を帯びた褐色の石英の削片を素材とした尖頭器で」「錯向剝離の技術や、出羽洞穴下層の資料などと対比して、下部

資料などとの対比して、下部旧石器の可能性を強くする」とその詳細が報告されて

出たもので、洪積世文化終

末期の岩宿Ⅰ石器文化(一三、一三〇年前)と同じころのものとされている。

この旧石器文化の時代は地質学的には洪積世といわれ、その時代は氷期と間氷期のくりかえしで、間氷期

でも、気温は現在よりも平均して七、八度も低く、ナウマン象やオオツノジカなどの絶滅してしまった動物

が棲息し、富士山や箱根山の火山活動も活発で、さかんに火山灰を降らしていたと考えられている。

前期では水之尾や諏訪の原、それに猿山に断片的な遺物が出土しているし、足柄上郡大井町の下山田には相当規模の大きい諸磯B式期の遺跡の存在が知られている。その下山田では、昭和四〇年に発掘調査が行なわれ、多量の土器片のほか

に、磨製石斧、石匙、石皿、磨石、石鏃、石錘などが採集されている。

中期になると、これまでに発見された遺跡の数も多く、小田原市早川の神明山南町の天神山、久野の一本松、千代台地、国府津山遺跡などの諸遺跡、南足柄市沼田の西念寺裏の丘陵上、同塚原の玉峰、同狩野の久保、同弘西寺の弘西寺遺跡大井町の金子台遺跡も存在

する、これらの諸遺跡のうち、二、三の遺跡については調査も行なわれ堅穴式住居址なども確認されているが、表面採集された資料も多く、なかには完形土器なども採集されている。

勝坂式土器は、豪華な裝飾と雄大な把手をもち、大型の土器であることよって知られているが、器面の文様には蛇や亀などの爬虫類が描かれたりする例も多く、弘西寺や天神山遺跡出土の資料のなかに蛇身土器の破片を見ることができ

る。

後期の遺跡は天神山・久野星山・金子台・久所の北畑の原・下曽我の城前寺附近・南足柄市の狩野・雨坪・西念寺裏などに存在する金子台と狩野では学術的発掘調査が行なわれたが、堅穴住居址などのほかに、配石遺構が発見されている。

配石遺構の性格については諸説があるが、金子台や狩野の場合は、墳墓であると考えられている。時期は加曾利BⅠ式期である。

ところで当地方の縄文文化時代の遺跡は、この加曾利BⅠ式期以降急激に減少して発見されなくなるのであ

る。学問的にみて、きわめて貴重な資料であるが、

〔Daе Historie Japan〕 の中で報告している。

しかし、このマンロー採集の資料は、その後のわが国の学界では、正しい研究の対象とはならず長い間放置されて、その行方も詳ら

たのであるが、去る(昭和四三年)になって、同志社大学考古学研究室に所蔵されている資料の中から、前記の踏査の際の採集品中の一点と推定される資料が再発見され「赤味を帯びた褐色の石英の削片を素材とした尖頭器で」「錯向剝離の技術や、出羽洞穴下層の資料などと対比して、下部

資料などとの対比して、下部旧石器の可能性を強くする」とその詳細が報告されて

出たもので、洪積世文化終

末期の岩宿Ⅰ石器文化(一三、一三〇年前)と同じころのものとされている。

この旧石器文化の時代は地質学的には洪積世といわれ、その時代は氷期と間氷期のくりかえしで、間氷期

でも、気温は現在よりも平均して七、八度も低く、ナウマン象やオオツノジカなどの絶滅してしまった動物

が棲息し、富士山や箱根山の火山活動も活発で、さかんに火山灰を降らしていたと考えられている。

前期では水之尾や諏訪の原、それに猿山に断片的な遺物が出土しているし、足柄上郡大井町の下山田には相当規模の大きい諸磯B式期の遺跡の存在が知られている。その下山田では、昭和四〇年に発掘調査が行なわれ、多量の土器片のほか

に、磨製石斧、石匙、石皿、磨石、石鏃、石錘などが採集されている。

中期になると、これまでに発見された遺跡の数も多く、小田原市早川の神明山南町の天神山、久野の一本松、千代台地、国府津山遺跡などの諸遺跡、南足柄市沼田の西念寺裏の丘陵上、同塚原の玉峰、同狩野の久保、同弘西寺の弘西寺遺跡大井町の金子台遺跡も存在

する、これらの諸遺跡のうち、二、三の遺跡については調査も行なわれ堅穴式住居址なども確認されているが、表面採集された資料も多く、なかには完形土器なども採集されている。

勝坂式土器は、豪華な裝飾と雄大な把手をもち、大型の土器であることよって知られているが、器面の文様には蛇や亀などの爬虫類が描かれたりする例も多く、弘西寺や天神山遺跡出土の資料のなかに蛇身土器の破片を見ることができ

る。

後期の遺跡は天神山・久野星山・金子台・久所の北畑の原・下曽我の城前寺附近・南足柄市の狩野・雨坪・西念寺裏などに存在する金子台と狩野では学術的発掘調査が行なわれたが、堅穴住居址などのほかに、配石遺構が発見されている。

配石遺構の性格については諸説があるが、金子台や狩野の場合は、墳墓であると考えられている。時期は加曾利BⅠ式期である。

ところで当地方の縄文文化時代の遺跡は、この加曾利BⅠ式期以降急激に減少して発見されなくなるのであ

る。学問的にみて、きわめて貴重な資料であるが、

〔Daе Historie Japan〕 の中で報告している。

しかし、このマンロー採集の資料は、その後のわが国の学界では、正しい研究の対象とはならず長い間放置されて、その行方も詳ら

たのであるが、去る(昭和四三年)になって、同志社大学考古学研究室に所蔵されている資料の中から、前記の踏査の際の採集品中の一点と推定される資料が再発見され「赤味を帯びた褐色の石英の削片を素材とした尖頭器で」「錯向剝離の技術や、出羽洞穴下層の資料などと対比して、下部

資料などとの対比して、下部旧石器の可能性を強くする」とその詳細が報告されて

出たもので、洪積世文化終

末期の岩宿Ⅰ石器文化(一三、一三〇年前)と同じころのものとされている。

この旧石器文化の時代は地質学的には洪積世といわれ、その時代は氷期と間氷期のくりかえしで、間氷期

でも、気温は現在よりも平均して七、八度も低く、ナウマン象やオオツノジカなどの絶滅してしまった動物

るが、秦野市平沢の同明遺採集されている他、わずかに飯田岡の諏訪の前遺跡で大洞A式および大洞A式的特徴をもつ数片の資料が採集されているだけである。また南足柄市怒田の上原や金子台遺跡でも多少の資料が出土している。

### 若い衆の昔話

内田 武雄

今では昔話をしてくれる人は少なくなった。子供たちに話をしてもあべこべに笑われるのがおちである。

私の子供のころはまだ電灯もなかったので夕方にすると母からランプのほやのそうじをしると言い付けられたものだ、当時のランプの辛ぼやと言われるのが一ばん多かったようである、その外竹ぼやとよばれるランプはシン巻ジンドで明るいがそのかわり石油が

たくさん入るので、ふとこるぐわいのよい家でなければあまり使わなかったようである、その外おだいな家でわ来客用に台ランプを使ったようだがそれは村でも一、二けんぐらいであったようだ、私の家でわた

集って来るのはとうぜんのものである、今とちがってラジオ、テレビがあるではないし、たまには小田原の有楽館で目玉の松つちやんの活動シャシなど見に行こうと話しがまともれば、午後三時ごろ家を出発してそれ一人や二人ではなく小田原までの道のり二里以上、上り下りあるのだから、女子も若者も引きつれて行かねばならなかった、一度などは、ししゅうに來ている嫁さんの慰安もあって、女子ばかり夜のおそく帰るのもたいへんであるので、活動の終ったあとと松の湯旅館へとまりお湯にはいりその後宴会になっておさわぎをした事をおぼえている。秋の夜ともなればからうす、くるりぶちと、たくさんの若い衆が集って来て色々手つだつてくれる勝手の井ろりのまわりにあつまって、一晚中も山の話しがはづむ、その内にお芋や大根などの切つたものが大ききな鍋へでじじいかぎにかける、じじいかぎの上の手とうにはなまづやふなの焼いたものが洋ぐしにさしてあるし、ろばたには大きなかすにお茶がち

集って来るのはとうぜんのものである、今とちがってラジオ、テレビがあるではないし、たまには小田原の有楽館で目玉の松つちやんの活動シャシなど見に行こうと話しがまともれば、午後三時ごろ家を出発してそれ一人や二人ではなく小田原までの道のり二里以上、上り下りあるのだから、女子も若者も引きつれて行かねばならなかった、一度などは、ししゅうに來ている嫁さんの慰安もあって、女子ばかり夜のおそく帰るのもたいへんであるので、活動の終ったあとと松の湯旅館へとまりお湯にはいりその後宴会になっておさわぎをした事をおぼえている。秋の夜ともなればからうす、くるりぶちと、たくさんの若い衆が集って来て色々手つだつてくれる勝手の井ろりのまわりにあつまって、一晚中も山の話しがはづむ、その内にお芋や大根などの切つたものが大ききな鍋へでじじいかぎにかける、じじいかぎの上の手とうにはなまづやふなの焼いたものが洋ぐしにさしてあるし、ろばたには大きなかすにお茶がち

かえりみて  
穂坂 行雄  
かえったのだらう、みんなのお寺へ行つてようすを見てこようではないかと、どやどや、墓場へ行きつくとかえつてこないものもどうり着物の裾がぐい木に打込ま

かえりみて  
穂坂 行雄  
かえったのだらう、みんなのお寺へ行つてようすを見てこようではないかと、どやどや、墓場へ行きつくとかえつてこないものもどうり着物の裾がぐい木に打込ま

し又家産を傾尽してまでも郷土史実の研究に専念せらるる風潮が、如何に來るべき世に貢献し且つ現代人を鞭撻するものであるかは贅言を要しない。(百姓一揆研究資料、小野武夫譚) 本会のたゆまぬ努力を切に祈る。

### お願い

史談会々報に会員皆様の寄稿をお待ち致しております。何でも結構です。何ぞし原稿をお送り下さい。尚スペースが少ないので原稿は当会所定の用紙で拾枚以内、四百字詰普通用紙で三枚以内になります。当会用紙は自分の間左記にあります。故お手数乍ら受取りに承て下さい。(編集部)

小田原市柴町二二二  
小林泰助宅

### 神保民蔵氏急逝に思う

## 神保 西蔵

去る二月十二日氏は熱海の日東館で教子に守られつゝ急に亡くなられた。

私達は皆驚いて、月に一回の支部会合にも、出席され一日の間和氣愛々の内に開散した。あの姿が未だ目に残っているのに最早此世に亡き人と思えば実に残念だと話合った。

神保先生は、教育者として、永く努力され退職後も尚市の要職にあったが、四年前胃癌の手術をされ、結果は良好で、なお二三の要職にあったのと思えば、誠に嬉しい人を亡した。

私は我神奈川県内でも、養蜂家として、最古参である業界でも皆認められている。また次のように叫んでいる「癌を攻撃する武器はいろくあるが私は癌を直接に攻撃することの危険を訴えたい、少くとも副作用のない健康法に一致する食法を見出したい。」

肉食と白砂糖の偏食は癌のもと、人間医学研究会々の大浦孝秋先生の談が記されているので御紹介をい

たします。「私は癌は食の改善を基とすべきものと断じている、玄米食を主とした、正食者は癌は発生しない。癌とともに常にあるものは白砂糖と肉食の偏食者である、食は血をつくる。マネンシウムの多い場合血液は病的アルカロシスとなるが、マジドーンズが、続いて血中のカルシウムが、減少しても、細胞と血液の間の惨圧が運転して、同じ結果が現われそれが癌を育てる培養の役割を果すことになる。」

酸素吸入、ビワの葉温法、食薬ローヤルゼリー、漢方薬、断食法、青汁療法、精神療法これらの利用は、患者の血液を、急激に一変させるであろう」と述べている、同書発行は人間医学社 価三五〇円、癌あるいは胃かいよう等不安を抱いている人はぜひ一読をおすすめする」とあった。

私も十年前から心臓病で苦しめられつつも蜂の仕事は止めることでさずぶらぶらながらも続けていた。今から五年前一寸した縁で大浦先生流の医学博士に見て貰うことができた。其時最早お前の心臓は回復しない、それどころか今にもマヒがこないとも云えない、しかし未だ少し望みがあると思えるからと云って太陽石から採ったと云う水薬と漢方薬を渡されし生活の改善を強く云渡した。此の大浦先生と同じ食

も返り見ず御知らせ申し上げたいである。我史談会の人々は皆中年以上の人達が多い、そこで私が思うに、我下曾我駅前でも二月に入り癌で死亡した人が二人もあった、そして高血圧の人が六人もあり近頃どうして癌や高血圧の人がこのように多いのか、それは大浦先生の云うように、肉食砂糖の食べ過ぎで

終戦前年私は村の収入役として役場に勤務する事になりました。屈強な吏員は成りませんでした。応召の徴兵適令期の青年と女子のみと成って居りました。従って宿直は助役と収入役のみが交替するより他にありません、私も観念して宿直の二度目の夜の事でした。

江戸時代よりも古風な髪形の女に背に馬乗りされて身動き出来ぬ程の力でぎゅうぎゅうな目にあい漸く跳うき起上りました不思議な夢です。汗が出る程の力を入れたのです。翌朝小使いの女の方が出て来ましたの

あり野菜、豆類、コンニャク、果実等の物から海藻類など種々混和して食すことと太陽石を水に入れて置き其の水で薬を飲み茶を飲むことに注意することと思つた。皆さんも共に食物の研究をして、永く此の世に在つて、我々の為めにも歴史の研究に務めて頂きたいと思つています。

### 収入役時代

## 神保 栄

前夜の出来事を話しましたら貴男もでしたかとの返事です、いぶかしい言葉なので聞き返しましたら男の方は一度は必づうなされますよと云ふ事でした。役場の土地は元は天王社があり神楽殿までありましたが地震で倒壊して跡方もなくなつて小笹の生い繁った地になつて居た地なのです。夢は只一度のみで其の後は何のこともありませんでした。空襲が度々あるので防空壕を宿直室の傍に掘りました。二米下の土台石の真下に一抱え位の大石がごろごろあるのに驚きました。ある

日私の親友が別に用事も無いのに尋ねて来て少時話して帰りました、この友の父君も収入役であり宿直の夜に急死されたのでしたが不思議にも友は帰宅の夜に急死したのです。

駅前空襲の時は折悪しく軍の砲弾や松根油のドラム缶がホームに山積されていたので、運悪く敵機の銃弾で松根油に火が付き流れ出し砲弾が次々に破裂して附近の家二十三戸も焼けて、砲弾の音とともに一時は近よるに命がけでありましたのです。役場には村長も助役も見えていません一人です。役場には、時々砲弾の破片が飛んで来ました。此の時駅前の銀行勤務の消防の小頭の方が銀行へ行かずに役場に来たのです、私は防空壕へ招き入れましたが彼はいつの間にか出て行きましたが少時すると彼は銀行の横で砲弾にやられ残念にも死んだのですという知らせでした。このいくつかの怪を見て今でも思い出すのです。今時にお笑いにならないで下さい。

其の後役場は新築された事を附記いたします。

其の後役場は新築された事を附記いたします。

### 三浦 第二回城址めぐり

第二回三浦半島城址めぐり 島フイツテで楽しい昼食をりは五月七日午前八時、参すませ、三崎城と北条湾へ加会員一二〇名を乗せたバス二台で出発、一路湘南遊歩道を海岸沿いに東進、史都鎌倉を左に見て逗子の六代御前の墓に詣で芦名の浄楽寺へ小綱代の新井城址、三浦義同、義意の墓、城ヶ

#### 解説 中野敬次郎

#### 六代御前の墓

(逗子市椋山)

六代御前の最後は平家滅亡の終末の悲劇で、平家物語にその哀話を述べている。六代御前は平維盛の嫡男(清盛の嫡曾孫)で、壇の浦合戦の後、源氏が平家一族の縁者狩を行ったとき、京都嵯峨で捕えられ処刑されようとしたのを文覚上人に救われたが、文覚が謀叛のかどで捕えられたとき、六代も捕えられて関東におくられ、この地、田越川の辺で斬られた。

#### 浄楽寺の仏像

(横須賀市芦名)

寺は浄土宗で金剛山勝長寺院浄楽寺という。源頼朝が鎌倉に建立した勝長寺院が大風で破損したので文治元年(一一八五)政子と和田義盛が本尊と諸仏をここに移したところだと言い、また、和田義盛が文治五年(一一八九)に建立した阿弥陀堂の一つとも伝える。

#### 新井城址と三浦義同、義意の墓

(三浦市小綱代)

城は永享十年(一四八三)三浦時高の築城。小綱代湾と油壺湾に面して三方海に囲まれた断崖上堅城であった。三浦義同、入道道守は岡崎城(平塚市)に居り嫡子荒次郎義意は新井城に拠って、大森氏と組んで北条氏に対抗したが、早雲は岡崎城を陥れて三浦氏最後の拠点新井城を猛攻したので、籠城三年で永正十五年(一五一八)落城し三浦一族は滅亡した。

代。文治五年の運慶の銘札が発見され、運慶が小仏師十人をひきいて和田義盛のために製作したものであることが明らかになった。

●不動明王立像 県重要文化財指定。寄木造、玉眼入り(鎌倉時代作) 胎内に運慶の銘作が納入されているものと想像されている。忿怒の状が迫力に富み豪快で頗る名作。

くだけてのちは「もとのつちくれ」が記されている。

●三浦荒次郎義意の墓 新井城の大手に当る木立の中に二個の墓碑がある。

#### 三崎城と北条湾

(三浦市城山城)

北条時代の海城城として有名である。

#### 来福寺の本堂と和田義盛木像

(三浦市南浦)

寺は山号を鹿穴山(和田山)願生院と称して、もと天台宗の古寺であったが、改宗して浄土真宗となった

和田義盛の菩提寺で、本堂は三浦半島寺院中の第一の大建築で、茅葺入母屋造で一見頗る雄大の感がある。寺内に蔵する和田義盛の像(木製座像)は寄木造、玉眼で黒漆塗である。義盛の老後の風貌人格がよくあらわれている。室町時代の作と思われる。

#### 三浦氏の墓のある満昌寺と清雲寺

(横須賀市大矢部町)

一両寺とも衣笠城の北麓にある。

清雲寺は臨済宗円覚寺派大富山清雲寺といい、三浦氏の祖、二代為経が源義家の家臣として後三年役に従軍した頃に建立したものである。

●三浦大介首塚 寺の裏の山腹の宝篋印塔を言う。右に五輪塔一基、左に約二メートルの板碑がある。

#### 衣笠城と三浦大介義明の討死

(横須賀市衣笠町)

衣笠城は衣笠山の東端にある広大な山城である。三浦氏の初代三浦為通が康平

五年に築城してから、宝治元年に七代泰村が一族とともに執権北条氏に攻められ滅亡するまで百八十余年の三浦氏の居城であった。四代三浦大介義明は一族四百騎で治承四年石橋山合戦の直後に籠城し、島山重忠を大将とする平家方三千騎とこの城に戦って敗れ、一族を城外に逃れしめ、一人城の中に踏み止って八十九歳の老齢を以って悲壮の討死をげた。城中にて自刃したとも、城外に出て江戸重長の平家勢に討たれたともい

●三浦一族の墓 冢に囲まれた正面三基五輪塔のうち中央が為経、左右が為経の父為通と子義経のものと思われる。宋代の作という。

●三浦大介首塚 寺の裏の山腹の宝篋印塔を言う。右に五輪塔一基、左に約二メートルの板碑がある。

大介義明は八十九歳で討死したが、建久八年頼朝がこの寺に参詣して十七回忌の供養を行って「大介は今も生きて」と言ったという俚言が生じた。

●毘沙門天立像 県重要文化財、像高七十七センチ、寄木造、玉眼入り、彫作当時の彩色、技法極めて優秀

●毘沙門天立像 県重要文化財指定。寄木造玉眼入(鎌倉時代作) 彩色は江戸時

ものもかわらけよ

### 規約改正と役員改選

#### 定期総会で決る

小田原史談会(中野敬次郎会長)は四月二日の総会に於て左の通り役員改選並に規約の改正を行なった。

▽会長 中野敬次郎 ▽副会長 山崎益太郎 ▽同 加藤誠夫 ▽同 香川政治(兼事務局長) ▽会計 広沢伊助 相沢栄一 ▽監事 杉崎正吾 星野喜久雄

#### 規約(47年度)

第1条 本会は小田原史談会と称する

第2条 この会の事務所を会長の指定する場所におく

第3条 本会は郷土の歴史と文化を研究するとともに会員相互の趣味と教養を高めることを目的とする

第4条 本会は第3条の目的達成のため次の事業を行なう (1)講習会及び座談会 (2)各地の口碑、伝説、遺跡、遺物の調査

第5条 会員は理事の紹介により会費を納入したものをもち資格とする

第6条 本会に次の役員を置く (1)名譽会長 (2)会長 1名 (3)副会長 3名 (但し事務局長1名) (4)理事若干名 (5)監事 2名 (6)名譽会員若干名 (7)参与若干名 (8)事務局 長 (9)会計 2名

第7条 名譽会長は理事会において市長を推せんし本会の指導者として推戴する

第8条 会長は理事会において選出し本会を代表する

第9条 副会長は理事会に於いて選出し会長を補佐し会長事故ある時は之を代行す

第10条 理事は単位団体の代表者及び学識経験者をもち充てる

第11条 監事と会計は理事の金銭出納にあたり監事は会計を監査する

第12条 名譽会員は理事会の推せんにより会長が之を委嘱し会長の諮問に應じ会の運営に参画することができる

第13条 参与は会長が委嘱し事業計画の諮問に應ずる

第14条 役員任期は二年とする

第15条 本会事務処理のため書記を置くことができ

第16条 本会は各地区に支部を設置することができ

第17条 本会の機構及び運営は細目をもって支部の細則はこれに準じて定める

第18条 本会に次の機関を置く (1)総会 (2)理事会

第19条 総会は次の事項を審議する 定期総会は年一回とし必要により臨時総会を開く (1)役員承認 (2)規約改正に関する事 (3)予算、決算に関する事 (4)事業計画その他重要事項

第20条 理事会は会長、副会長、理事をもって構成し次の事項を処理する (1)役員選出に関する事

第21条 総会及び理事会は出席者数をもって成立し決議は出席者の過半数の同意を必要とする

第22条 本会の経費は会費補助金、寄付金を以て充てんとす

第23条 本会の会費は一人年間六〇〇円とする

第24条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり3月31日に終る

新理事に左の四氏が就任 高橋大次郎(江ノ浦二九五) 竹見竜雄(小竹三九二) 内田勝彦(前川) 市川将貴(板橋一五四)

三月廿八日、所用で東京中野の新井薬師さんの前を通りましたところ、縁日で屋台店や植木市でいっぱい賑わいであります。そこで二度目のお参りをしてみました。その日は境内のお不動さんの御縁目で、と改め永禄十一年(一五六八)当地に来たり、草庵を

### 新井薬師と北条氏

東泉院 岸 仙 外

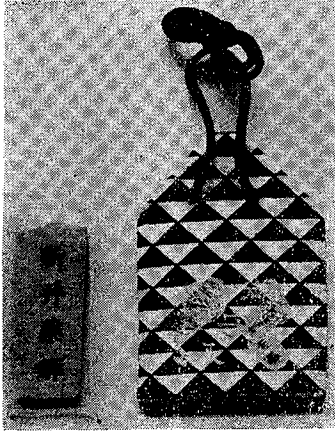
ここは正確には新井山梅院といひ真言宗で本尊は新田家の守護仏であったと云うですが、開基は元北条家

の臣梅原将監出家して行春と改め永禄十一年(一五六八)当地に来たり、草庵を

建てたといふ。四月上旬桜花の盛りを友人誘い合せて私は大和の十津川を下り、熊野三社を参拝してのち勝浦、白浜の景勝地を見て有田町に着いた

当地は沖の暗いのに白帆が見ゆる。あれは紀の國蜜柑船と歌われた紀の國屋文左エ門の生誕地である。碑文が立っていて「元禄の商家紀文の碑、十七代砲山」とある、その砲山は現在死んでいなく今の人は百姓を

しているようだ。村人の話には紀文は漁師の息子で漁に出た、商才があつて七歳位にははや竹トノボを造つて売つたことが



結んで修業道場としたといわれまふ。永禄十一年といえは氏政の治世で武田信玄が駿河に侵入し、氏政は信玄と絶ち今川氏を助けた年にあたります。

お寺で売っていた縁起書を読んでみると、隣にらんでいられるお守袋に北条氏の家紋が入っています。一つ買ってきたのが写真のそれです。

### 紀文

小林泰助

四月上旬桜花の盛りを友人誘い合せて私は大和の十津川を下り、熊野三社を参拝してのち勝浦、白浜の景勝地を見て有田町に着いた

当地は沖の暗いのに白帆が見ゆる。あれは紀の國蜜柑船と歌われた紀の國屋文左エ門の生誕地である。碑文が立っていて「元禄の商家紀文の碑、十七代砲山」とある、その砲山は現在死んでいなく今の人は百姓を

しているようだ。村人の話には紀文は漁師の息子で漁に出た、商才があつて七歳位にははや竹トノボを造つて売つたことが

